
艦魂ともうひとつの日本海軍史外伝 河用砲艦「羽州」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂ともうひとつの日本海軍史外伝 河用砲艦「羽州」型

【Nコード】

N1174Y

【作者名】

火龍

【あらすじ】

本作は「艦魂ともうひとつの日本海軍史」の外伝であり、本編第七十六話「米砲艦の最期」に登場した「羽州」型砲艦の生涯を描いたものです。彼女たちは「内地」と呼ばれた日本本土の防衛ではなく、清国（後には中華民国）に滞在する日本人の生命や財産を護るために建造され、その生涯の大半を大陸で過ごすことになりました。外伝という慣れない形式での執筆とはなりますが、どうかご期待ください。

第一話 海の領事館

日露戦争後、日本は清国国内における權益を拡大。それに伴い少なくない数の日本人が大陸へと渡っていったが、当時の清国は国内の警察さえまともに機能しておらず、何らかの対策を講じなければ現地にいる日本人の安全が脅かされることは明白であった。

そこで日本は、勇の提案もあつて英仏に続き河用砲艦と呼ばれる軍艦の建造を決定。河用砲艦とは黄河や長江を初めとした川を遡行できるよう喫水が浅いという特徴を持つており、長江の場合は一八九七年に浸水したイギリス海軍砲艦「ナイチンゲール」級四隻がその先駆けと言われている。

なお「ナイチンゲール」は排水量八五トン、全長三三メートル、喫水〇・六メートル、速力九ノット、五七ミリ砲二門という要目である。軍艦としては極めて非力であると言わざるを得ないが、目的は専ら自国区民及び自国權益の保護と威嚇であつたため、この程度でも十分であつた。

日本は史実において、当初「宇治」（初代、常備排水量六二〇トン）や「嵯峨」（同じく七八五トン）といった比較的大型の河用砲艦を整備していた。ところが喫水が二メートル以上ある彼女たちでは遡行できる範囲に限界があり、後には「勢多」型（常備排水量三三八トン）や「熱海」型（基準排水量二〇六トン）等の小型砲艦ばかりを整備するようになっていったのである。

勇はこの事実を踏まえ、河川の貨物運搬用に開発された一二五トン級指定船の基礎設計を流用してはどうかと提言。小型艦では心理的な抑止効果に劣り、自国民及び權益の保護という効果が不十分な

ものになるのではないかという意見もあったが、イギリスが清国に派遣している砲艦がほとんど二百トン前後かそれ以下の小型艦であると伝えられると、反対は弱まっていった。

こうして、以下の要目で「羽州」級砲艦十二隻の建造が決定。当時砲艦の名には名所旧跡の名が付されていたが、軍艦の中に河用砲艦の類別が新設されるとともに、任務の重要性や国威発揚の面から「州」の字がつく旧国名の別称がつけられることになり、一九一〇年の「羽州」を皮切りに三年間で一二隻が就役した。

全長三五メートル、幅七メートル、深さ一・七五メートル、喫水〇・七メートル

基準排水量一二五トン、満載排水量一五〇トン

重油専焼缶二基、レシプロ二基二軸、六〇〇馬力

速力一五ノット、航続距離一〇ノット（二四〇馬力）で二八八〇海里、燃料搭載量一八トン

・居住設備

士官、特務士官及び准士官合計三名（予備士官室含む）、下土官兵三六名

・兵装

五〇口径単装三インチ砲二基二門（船首楼、艦尾）

七・七ミリ単装機銃四基四門（艦橋左右に二門ずつ）

貨物船を基にしたため艦尾に四層の艦橋があるという特異な艦型であり、船首楼と艦橋の間には長さ一七・五メートルに亘って平らな甲板が広がっていた。これは河用砲艦に特徴的な大型の艦上構造物を無くすことで凌波性の向上をもたらすのと引き換えに、艦内容積の縮小による居住性の悪化という弊害もあったが、艦内に居住設備の大半を備えることで事なきを得た。

本来河用砲艦というものは、居住区を全て艦上構造物に集約し、船体内部には半埋め込み式の機関室以外の区画を設けない。だが「羽州」型は船体の深さを増したことで、機関室のみならず倉庫や居住区も船体内に収めることができ、また満載時にも乾舷が一メートルを超えたために内地への航行も不可能ではなかった。

武装については船体の縮小に合わせた妥協が為され、三インチ砲二門を艦橋の後方と船首楼上に装備。また艦橋部分には七・七ミリ機銃四門が据えられ、歩兵や軽車両といった目標に対処することが想定されていたが、将来的には対空火力の向上も兼ねて二〇ミリ機銃に換装予定であった。

また貨物船を基にしているため、船内には船首楼の直後から長さ一〇・五メートルに亘る貨物倉があり、ここに数十トンの物資や兵員二個分隊を乗せることができた。このことが結果として彼女たちの汎用性を大きく高め、辛亥革命や軍閥の掃討において大きな効果を発揮することになるのだが、当時は設計者の勇自身でさえ予想していなかった。

これらの特徴を有していた「羽州」型は、一番艦の「羽州」が佐世保海軍工廠において一九〇九年四月一日に起工し、半年後の九月三十日に進水。彼女の進水式には、当時海軍中尉であった勇も参列することになった。

第一話 海の領事館（後書き）

作者「連載が始まったはいいいけれど、この話で一ヶ月持つかどうかさえ疑問だよ」

富士「で、後は裏方の架空兵器ばかり外伝形式で取り上げていくつもりか？」

作者「本作に殆ど登場しなかったとはいえ、魚雷艇や特殊な潜水艦の話は考えてあります。加えて砕氷艦や小型潜水艇、モニターの設定も考えてはありますが、艦魂のネタが浮かばず手詰まりとなっております」

敷島「いつそ、どこかのアニメや漫画からパク……もとい、参考にしてくればいいんだよ」

作者「それができればいいのですが、中学時代からは小説はおろかアニメや漫画も数作品しか触れずに、軍事にはかり傾倒してしまいたから。ましてや、ある種のゲームのように女性の登場人物が何人も出てくる作品なんて、それこそ『ガンダム』シリーズぐらいしかまともに見たことがありません」

三笠「その『ガンダム』シリーズも。架空の世界観とは言えある種の軍事関連だと思っのですが……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、砲艦『羽州』の艦魂が登場しますが……次回『船体も艦魂も変わり者』ご期待ください」

第二話 船体も艦魂も変わり者

一九〇九年九月三十日、佐世保海軍工廠。

「少し、違和感があるけれど……仕方ない、か」

勇が、艦首から「羽州」の艦橋を見上げてそう呟く。基本設計の流用による建造の簡易さや実用性を重視したためとはいえ、既存の河用砲艦とあまりにもかけ離れた彼女の艦型は、設計者の勇自身さえ違和感を覚えるものであった。

むしろ艦装で砲や機銃が装備されていない現在では、他の一二五トン級指定船との差異を見つけることは困難であり、例えここから貨物船に作り直したとしても延長される後期は精々一カ月といったところであった。それほどまでに、「羽州」型砲艦は一二五トン級指定船の特徴が色濃く残っていたのである。

「有馬中尉、もう乗艦なさっていたのですね」

「おお、大隅か」

姉妹艦四隻の竣工に伴い、慣熟訓練を終え第一艦隊に編入されて佐世保に來航していた戦艦「大隅」の艦魂、大隅が勇の近くに現れる。なお「三笠」、「富士」、「敷島」及び「朝日」の四隻は、「鹿島」及び「香取」とともに第二艦隊に所属し、主に舞鶴方面で活動中である。

「船体が非常に浅いですが……清国まで回航できるのですか？」

「対馬海峡と済州海峡を通って黄海を北上した後、一先ず旅順に寄港することになる。黄河や長江に出向いてもらうのは、それからだ」

二人が会話している間に時間は過ぎていき、進水時刻が近づいているという旨が伝えられ、二人は艦橋二階の右舷艦首側にある予備士官室に待機。そしてついに船台へと注水が始まり、暫くして「羽州」の船体が浮かび上がった。

直後、船首楼の上に閃光が灯る。その光が消えた後には、短髪で十代半ばぐらいに見えるややあどけない顔つきの、小柄な艦魂が立っていた。

「彼女が、この艦の艦魂のようですね……それでは、連れて参ります」

「ああ、頼んだよ」

立礼をして船首楼へと瞬間移動した大隅は、羽州と暫く言葉を交わしてその場から消える。すると羽州は大隅に付き添われ、直接予備士官室へとやってきた。

「お初にお目にかかります。大日本帝国海軍羽州型砲艦一番艦、『羽州』の艦魂です。あなたが、大隅長官の仰っていた有馬中尉ですね？」

大隅と同じように丁寧ではあるが、羽州はどこか彼女と異なり、警戒心が見え隠れする口調で話す。目つきも富士ほどきつくは無いものの、視線は鋭かった。

「ああ。でも、そんなに緊張しなくても……大丈夫？」

「私にとっては……これが、普通の話し方ですから。無愛想だと思われたのであれば、申し訳御座いません」

謝意を告げて頭を下げる様子も、どこか余所余所しい。勇個人としてはこの程度で咎める気にはならなかったものの、清国に派遣される砲艦という任務の都合上日本のみならず清国や欧米の艦魂と会う機会も想定される彼女の立場を考えると、このままでは艦魂同士でいさかいを起こすことも考えられた。

とはいえ、自分がこの場で羽州に注意をしたところで、生まれつきの性格を変えられるとは考え難いこともまた事実であった。こう考えた勇は、大隅に手招きをし、近くにやってきた大隅にこう耳打ちした。

「あの様子だと、外国艦魂との交流に支障が出かねない。僕が今言っただけでは聞いてくれないかもしれないから、後々大隅から言うておいてくれないか？」

「確かに、由々しき問題ですね……了解です」

目の前でひそひそと話す二人を見た羽州は、当然何事かと不審がる。だが良くも悪くも慎重な彼女は、新参者である自分が関わってよい事柄なのではないのだろうと自分を納得させると、そのまま黙ってその場に立っていた。

その後勇は大隅と二人で今後の予定などを伝え、艀装用の棧橋に繋留された「羽州」から下艦。一抹の不安を胸に、今後発生するであろう辛亥革命や欧州大戦（第一次世界大戦）への対策を講じるべく、鉄道で東京へと戻っていった。

第二話 船体も艦魂も変わり者（後書き）

作者「南無三。本編で決定的な勘違いがあった」

富士「何があった?」

作者「欧州大戦の際、青島にいたドイツ海軍艦艇を駆逐艦『ターク
ー』と水雷艇『S90』のみであると書いていたのですが……河用
砲艦の存在を無視していたようです」

敷島「で、どうするの?」

作者「最初は進退窮まったドイツ軍が第一艦隊の侵攻前に中国へ売
り渡したとか、いろいろ考えたのですが……他国とは言え船に身売
りをさせるような真似は好きではないので、別の方法で辻褄を合わ
せようと思います」

三笠「別の方法って、まさか……それはともかく、次回予告をお願
いします」

作者「次回、羽州に続いて妹が登場します。次回『真逆の性分』ご
期待ください」

第三話 真逆の性分（前書き）

登場人物解説

羽州（羽州型河用砲艦一番艦）

身長 一五六センチ

外見の年齢 十代半ば

同型艦 十二隻（全て建造中）

実直で朴訥な、河用砲艦の艦魂。警戒心や猜疑心を抱きやすく、それ故に口調も自ずと無愛想な、ともすれば怒っているような印象を相手に与えかねないものとなっている。勇や大隅からは彼女が河用砲艦ということもあって心配をされるが、羽州自身はそれを自覚しながらも直すに直せない。

第三話 真逆の性分

それから月日は流れ、第一陣として建造されていた「羽州」「陸州」「豊州」及び「紀州」の四隻が相次いで竣工。一九一〇年三月一日に、四隻はイギリス製の河用砲艦である「宇治」「隅田」及び「伏見」らが待つ旅順に向け佐世保を出港した。

出港翌朝、砲艦「羽州」船首楼。ここで、日本を後にした羽州が艦首の三インチ砲に右手を突きながら、一人物思いに耽っていた。

「私たちの任務は、清国内における日本の権益や国民の保護。なら、次におそらく私が本土に戻るのは……解体されるとき」

自らの死について考えているとは到底思えないほど淡々と、羽州は自らの憶測を呟く。警戒心が強く、どこか超然とした態度は、進水以来大隅による再三再四の助言を聞いてなお変わっていないかった。

「大隅長官、申し訳御座いませぬ……私の性分は、おそらく暫くはこのままであると思われませぬ」

「羽州姉さん、何ぼそぼそ言ってるの？」

「ちつ……豊州」

いつの間にか妹に背後を取られていたと知り、羽州は周囲への注意がまるで払えていなかったことへの自戒の念を込めて舌打ちをする。自分より一月遅れで生まれたこの妹を、羽州は非常に苦手としていた。

彼女は羽州型砲艦三番艦「豊州」の艦魂、豊州である。身長が五尺程度で、顔つきも鼻眞目に見たところで十代半ばといったところ

ではあったが、性格や言動が小さな敷島のようにであり、実直で口数の少ない羽州から見るとまさしく最悪の相性であった。

「私たちの将来について考えていた……ただ、それだけ」

「ふーん。真面目だねえ」

「私は、姉妹十二隻の旗艦も務めなければならない。旗艦として当然のこと」

自分の思案を妨害された羽州は、言葉の端々に早くどこかへ行つてほしいという苛立ちを隠せない。だがそんな姉の心の内を知つてか知らずか、豊州は一向に話しかけることを止めようとはしなかった。

「外国の艦魂つて、どんな艦魂だろうね？」

「分からない。でも、私はどんな艦魂が相手であろうとも、私情で任務を潰すような真似はしたくない」

終始ぶっきらぼうな姉に、豊州は機嫌を損ねる。彼女としては悪気は無く、純粹に姉との親交を深めたかっただけであるのだが、肝心の羽州がこの態度では、豊州としても如何ともし難かった。

「……そう、わかった」

豊州は寂しそうな表情で「羽州」を後にしたが、先程から体勢を変えず彼女に背を向けたままの羽州には、それを知る術がない。ただただ、これからの任務に不安と使命感を交錯させながら、目の前の海を見つめるだけであった。

三日後の三月十八日、四隻は日本の租借地である旅順へと到着。イギリス製の砲艦三隻からなる第四一戦隊（河用砲艦による戦隊は

四十番台の番号がつけられることになった)が旅順そのものの警備を主任務とするのに対し、「羽州」型四隻の第四二戦隊は黄河の警備を請け負うことになった。

中でも「羽州」と「豊州」が第一小隊、「陸州」と「紀州」が第二小隊をそれぞれ構成。常にどちらかの小隊が黄河に常駐することとされ、第一小隊は補給を終え次第、旅順到着の二日後には黄河へと向かっていった。

三月二十二日、第四一戦隊第一小隊は黄河河口に到着。念のため名目上は清国の許可を取った上で、緊急時にどこまで黄河を遡行できるか試すべく、機関に不要の負担をかけない範囲での実験が行われることになった。

とはいえ、この申し出は飽くまで形式的なものに過ぎないと言える。当時の清国はアヘン戦争や日露戦争に追って国家としての威厳を失墜させており、また日本や欧米列強の要求を撥ねつけるだけの軍事力も持っておらず、ほぼ断りようが無かったからだ。

「最初の正念場まで、あと一年半といったところ……短い、それまでに詰めるだけの経験を積んでおかなくては」

佐世保を離れる前、羽州には大隅から辛亥革命の内容が粗方伝えられていた。その生真面目な性格から、羽州は最初大隅の頭がおかしくなったのかとさえ考えていたが、後に再び佐世保を訪れた勇にまで同じことを言われては納得せざるを得なかった。

二隻がこれから遡行する黄河の流速は、華北平原と呼ばれる地域を流れている間はさほど速くない。ところが鄭州と呼ばれる街の側を通り、太行山脈や秦嶺山脈がある山岳地帯にさしかかると、急に

流速が増すのである。

そこで、試験航行の目標は山岳地帯に入って間もなくの洛陽と決定。事と次第によっては「羽州」型砲艦そのものの価値を決定づけかねない、日本海軍艦艇として初の黄河遡行が、今始まったのであった。

第三話 真逆の性分（後書き）

富士「船体といい艦魂といい、この羽州とやらは河用砲艦としてどうなのだ？」

作者「かといって、豊州のように無邪気かつ無遠慮……というのも困りものですけどね。船体は……使い勝手の良さや生産性を重視しすぎたらこうなりました」

朝日「まさか、一から砲艦を設計するのが面倒だったのではありますまいな？」

作者「それも、一理あるような気がしないと言えば嘘になるかもしれない、とだけ言っておく」

三笠「やたらと長ったらしい言い訳はともかく、次回予告をお願いします」

作者「次回、羽州の堪忍袋の緒が切れかかります。次回『突きつけられた最後通牒』ご期待ください」

第四話 突きつけられた最後通牒

三月二十二日朝、黄河河口付近。

二隻の砲艦が堂々と、しかし清国を不必要なまでには刺激しないよう慎重に進む。アヘン戦争などをきっかけとして、この半世紀ほどで急激に政情が不安定になりつつあった清国内を外国の艦船が航行する際には、それ相応の覚悟というものが必要であった。

「確か、この周辺には鉄やボーキサイトの鉱山があるはず……やばり、開発はされていないみたい」

黄河の河口近くにある東営の市街地を見ながら、羽州がぽつりと口にする。史実において勝利油田と呼ばれることになる周辺の油田は、少なくとも清国内において史実の大慶油田に次ぐ約十五億トンの埋蔵量を有し、また近辺にはガス田や鉾山も存在しているのだ。

そして来たるべき辛亥革命が勃発した際には、日本は国民党への軍事支援やその後の開発援助と引き換えに、各種天然資源の採掘権や優先的な輸入といった特権を要求する予定であり、この勝利油田もその対象として目をつけられていた。

「日本の石油需要が、軍民問わずこれから急増していくのは明白……なら少しでも多くの権益を確保しておく、そして私たちがそれを守らなければ」

進水から竣工までの半年で、羽州は大隅から軍事のみならず、政治や経済を初めとして後知恵を含めた幅広い分野の知識を授けられていた。これも羽州の任務が、外国の領域内における日本の国益を

保護する重要なものであり、平時から軍事の枠内に留まらない影響を及ぼし得るものであればこそだった。

翌三月二十三日夕方、黄河河口からおよそ二百八十海里遡航した鄭州付近。二隻は一日半近くに亘って航海を続け、いよいよ問題の太行山脈にさしかかろうとしていた。公試や旅順への回航を除いた初めての航海における山場とあって、羽州の緊張はいつも以上であった。

「姉さん、姉さん」

「何、豊州？」

「暇だから、来てみただけだけど？」

妹の答えに、羽州はまたかため息をつく。佐世保を出発して以降、豊州は暇だと言っては、毎日のように幾度となく「羽州」を訪れていたのだ。それは旅順を発つてからも変わらず、初の本格的な任務ということで気を張っていた羽州の神経を逆撫ですることになる。

「暇だったら、海岸沿いの市街地でも眺めていればいい。哨戒の練習にもなる」

「そんなこと言っただって、何時間も見ていれば飽きるよ」

「むづ……内地から持ってきた資料や書籍は？」

「面倒だから、ちゃっっちゃと読み飛ばしちゃった」

妹の海軍艦魂にあるまじき発言を聞いた羽州は、理性を失って大声で起こりそうになるのを必死に堪える。彼女は豊州が難解な書物に苦戦するであろうことは見抜いていたものの、よもや面倒だからと適当に読み終えてしまうなどは予想しておらず、そのぶん怒りも相当なものであった。

「えっと……姉さん？」

「豊州、せめてあれぐらいは時間がかかってもいいから読んでおいて……そうしないと、あなた自身の命でその怠惰を償わなくてはならなくなるかもしれない」

「ひっ！」

羽州の口調は怒りを隠そうとするあまり不気味なまでに冷淡で、寒気がした豊州はたまらず上ずった声を漏らす。だがどうにか冷静になって姉の意図を汲むと、暫くして「ごめん」とだけ呟き、慌てて自分の艦へと戻っていった。

「少し、言い過ぎたかな……でも、私は本当のことを言ったまで。これ以上今の豊州を放っておいたら、あの子や私どころか日本全体にまで悪影響を及ぼしかねない」

心なしか申し訳なさそうな表情になりながら、羽州は自分の正当性を自分に言い聞かせるように口にする。史実において日本や清国が辿った歴史を、また河用砲艦という軍艦の任務の特性や重要性を知っているが故に、羽州は思わず厳しい言い方をしてしまったのだ。

だがそれらの知識は羽州自身が持つ生来の警戒心と相まって、羽州が気付かないうちに、彼女自身にとつての重圧にもなっていた。日本海軍軍艦の艦魂だから、そして河用砲艦の艦魂だからこうあらねばならぬという不文律を自分の中で無意識のうちに形成してしまいい、自縄自縛に陥っていた。

さらに悪いことに、彼女を緊張に追い込む理由がもうひとつ存在していた。それは彼女が「羽州」型砲艦の一番艦であり、現在旅順にいる「宇治」「隅田」及び「伏見」の三隻が現役を退いた場合、

高確率で「羽州」が清国（及びその後身である中華民国）方面に駐留する河用砲艦の旗艦となる可能隻が極めて大きいことである。

「ゆくゆくは、私が一人で十二隻の姉妹を纏めなければならぬ。なら、今のうちに必要な経験や知識を全て身につけて、旗艦就任に備えるだけのこと。そのためにも、まずは私たちの限界を知らなければ」

そう言って、彼女は黄河の流れが急になる境とも言える鄭州の市街地を見つめながら、何時間も双眼鏡を持って露天艦橋に立ち続けた。時に、黄河の遡航開始からおよそ三十時間後のことである。

第四話 突きつけられた最後通牒（後書き）

敷島「……いろいろな意味で、よく訓練された艦魂だねえ」

作者「河用砲艦というのは、海軍のみならず国家そのものの外交使節のようなものですから。知識や経験が軍事一辺倒では、良くないかと」

富士「そういえば、大慶油田は史実で中華人民共和国建国十周年の年に発見されたから大慶油田と名付けられたそうだが……この小説ではどうなるのだ？」

作者「年代を合わせるとすれば……民国四十年か五十年に発見されたということにすればよいかと。後者だと五十周年ですからより節目の年という意味合いが強まる代わりに史実より若干時期が遅れてしまいますが、それまでは対米戦勝利の直後に試掘して発見されたことにする……もとい発見される勝利油田で食い繋いでもらいますよ」

三笠「で、分け前はしっかり頂戴するわけですね……次回予告をお願いします」

作者「次回、姉に脅された豊州のとった行動は如何に？ 次回『無我夢中』ご期待ください」

第五話 無我夢中

暫く後、砲艦「豊州」予備士官室。

「どつしよつ……やっぱり、このままじゃあまずいのかな？」

机に向かつて資料に目を通し始めた豊州だったが、目に飛び込ん
でくるのは数字や専門用語ばかり。真面目な性分ではない豊州は、
軍艦の艦魂なら軍事的な知識を全て身につけた状態で生まれてくれ
ればいいのにと、ありもしないことを夢想しながら溜息をついた。

「とはいってもねえ……いつそ、あの時適当にはぐらかしておけば
よかったよ」

それでも、豊州は無我夢中で資料に食らいついていく。そうして
いれば多少は姉から言われた言葉の衝撃を紛らわせることができた
し、彼女としても自分の怠惰が原因で命を落とすことは本意とする
ところではなかったのだ。

豊州に時間の感覚がだんだんと消え失せはじめていた頃、「豊州」
は左舷側に転舵を開始。それにはっと気付いた豊州が気晴らしを兼
ねて船首楼に降り立つと、先程はまだある程度高いところにあつた
はずの日がとうに暮れており、黄河から南に分岐した支流に入った
ところであつた。

「そつか、もう洛河に入ったんだ」

洛河とは黄河の支流のひとつで、古くは洛水と呼ばれていた川で
ある。全長はおよそ四二〇キロメートルに及ぶが、今回の任務では

河口から三十海里ほどの所にある洛陽付近まで航行し、そこで一夜を明かすことになっていた。

気付けば、洛河の流れに押される「豊州」や「羽州」の船足は、実質十ノット足らずにまで落ち込んでいる。豊州は取り敢えず任務が無事に完遂できそうだと安堵の息を漏らしたが、直後に彼女はふと懐中時計を見て愕然とした。

「も、もうこんな時間！ …… ってことは、まさか五時間も資料を読んでいたの？」

事の次第に気付いた直後、豊州を強烈な頭痛が襲う。普段文章を読むことが少ない彼女にとって、無意識のうちにはいえ五時間も資料に目を通し続けるということは心身に相当な負担を強いることであり、そのしわ寄せが時間の経過の自覚をきっかけとして一気に押し寄せたのだ。

「あ、あいててて…道理で、こんな暗いはずだよお」

痛み始めた頭をさすりながら、豊州は慌てて自室へと戻る。そしてろくに寝る準備もしないまま寝台へと倒れこむと、疲労からそのまま眠りこけてしまった。

翌朝、「豊州」予備士官室。

「うっん…… もう朝かあ」

昨晚の疲れによる眠気はまだ残っていたが、遅くまで寝ていることが姉に知られてしまえば要らぬ誤解をされ、また要らぬ説教を受ける羽目になりかねない。そう考えた彼女はやっこの思いで起き上

がり身支度を整えると、眠気覚ましのために船首楼に移った。

船首楼に降り立った彼女の右手側に、洛陽の市街地が見える。紀元前七七〇年、周の平王が東周として国を再興する際に都を遷して以来、洛陽は度々歴代王朝の都が置かれてきた。そのため洛陽は当時に至るまで河南（黄河南方）地方屈指の都市であった。

「あれが洛陽かあ。けっこう大きいね」

感心したように呟きながら、豊州は洛陽の街を見つめる。すると艦橋から「両舷前進半速、取り舵一杯」という声が聞こえ、「豊州」はその場でゆっくり反転すると洛陽の街から遠ざかっていった。

こうして実地試験とも言える最初の任務を達成した二隻は、三月二十七日に旅順へと帰投。彼女たちと入れ替わる形で旅順を発った「陸州」及び「紀州」の第二小隊も無事に洛陽までの往復に成功し、「羽州」型砲艦は少なくとも黄河において十分実用に耐える性能を有することが確認された。

このおよそ一年後には、「武州」「備州」「雲州」及び「和州」の四隻が就役。第四十二戦隊を組む第一小隊の「武州」と「雲州」、第二小隊の「備州」と「和州」が交代で長江の警戒に当たることとされた。そしてこの態勢で、辛亥革命の勃発を迎えることとなる。

第五話 無我夢中（後書き）

作者「南無三。十五話も書いていないのにネタが尽きた」

朝日「まあ、見せ場と言えば欧州大戦と対米戦ぐらいしかありませんからな」

敷島「それに、対艦戦はそれぞれ一回ずつぐらいしかないだろうしねえ。登場人物が増やせれば、普段の様子なんか描けるんだろうけど」

作者「軍人だろうと艦魂だろうと、そう簡単に設定を思いつきはしませんよ……私の発想力が貧困であることは、重々承知の上ですが」

三笠「本作の後に主役となる架空の艦船たちも、設計だけ終わっているような状態ですからね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「辛亥革命で、彼女たちが仰せつかった任務とは？ 次回『恩を売れ』ご期待ください」

第六話 恩を売れ

一九二一年十月十日、武漢南西およそ三十キロメートルの長江沿いにある武昌において、前日夜に爆薬を確保していた工兵中隊が反乱。騎兵中隊や砲兵中隊などの増援も加わり、僅か一日後の十一日正午には、現地の総督を漢口の租界へと逃亡させて武昌の全域をその占領下に置いた。

次いで反乱軍は翌日に西方の漢陽と、およそ三十キロメートル北に位置する漢口を占領し、武昌と合わせていわゆる「武漢三鎮」を制圧。この事態に対し、漢口にあった各国の領事団は反乱軍を交戦団体と認め、翌十三日には中立の立場を表明した。

これにより革命軍は表向き外部からの支援を受けられない状況になったものの、日本はそれまで黄河を警備していた第四十一戦隊を含め、八隻の砲艦を長江に投入。名目は武漢三鎮周辺の自国民及び自国権益を保護するためということであったが、実態は異なっていた。

十月十五日、まず第四十一戦隊の四隻が、反乱の只中にある武漢を直指して旅順を出港。彼女たちの貨物倉には、この時のために予備糧食の名で買い集められていた食料が満載されていた。なお当然のことながら、艦魂たちを除けば史実における辛亥革命の顛末を知っている者は誰一人おらず、ただ革命軍に対して秘密裏の支援を行うことだけが命じられていた。

「まさか、本当に貨物船紛いのことをやらされるとは……任務とはいえ、複雑です」

自分の船内で山積みになされた食糧を見ながら、羽州が困ったように愚痴を零す。このせいで「羽州」以下四隻の喫水は一メートルを超えており、平時の彼女たちをよく知る者が見れば、まず間違いなく違和感を抱いてしまうような状態であった。

ところが、幸い彼女たちは就役してからまだ日が浅い。そのため外国人が多数いる上海の沖を航行した際にも、彼女たちの行動や状態を不審に思った者はおらず、また見た目は河用砲艦と言うより「砲と機銃を装備しただけの小型貨物船」にしか見えなかったため、写真などの形で記録に残されることも無かった。

こうして四日後の十一月十九日の夕方には、四隻とも無事に武昌付近へと到着。その夜、清国の目を盗んで装載艇で貨物を陸揚げし、反乱軍へと引き渡すこととなった。

「うまく、やり果せてくれればいいのですが……もし見つければ、不味いことになります」

引き渡しの完了を今や遅しと待ちながら、眠るに眠れない羽州は露天艦橋でその様子を見守る。彼女は自分が何ら今の状況に貢献できないことを歯痒く思いながら、ただただじっと待ち続けていた。すると同じように眠れなかったのか、豊州が近くにやってくる。

「どうしたの？」

「こんな状況じゃあ、寝るに寝れないよ……もし清国に見つかったら、どうするの？」

「一度中立の立場を表明した我が国が、こうして肩入れするのは明らかに問題。だけれど、少なくともこの革命が成功するまで隠し通ささえすれば、勝てば官軍と言うこともできる」

「まあ……確かに、自分たちが起こした反乱に対する支援を秘密に

する理由はあつたとしても、権力を握つた後にわざわざ非難する理由は無いからねえ」

史実でこの革命が成功したことを知っているからこそ、将来国内で必要となる資源を確保するために、日本は危険を承知の上でこの支援に踏み切つた。このことは羽州と豊州のみならず、勇を含めた史実を知る者の一致した考えであつた。

幸い、武昌のみならず周辺一帯が革命軍の勢力圏となつていたことも手伝つて、この物資引き渡しは清国側に知られることは無かつた。そしてこれに味を占めた日本は、この後も度々在留邦人の保護という名目で砲艦を革命軍の占領地に赴かせて物資輸送を行い、革命軍に恩を売り続けたのである。

こうした革命軍、後に国民党（宋教仁が設立）への支援は清王朝の打倒後も長期に亘つて続き、史実では失敗していた一九一三年七月の第二革命を成功に導く。そして、イギリス生まれの三隻に「羽州」型の十二隻を加えた十五隻の日本海軍砲艦は、中華民国とともに軍閥の掃討を行うことになつた。

第六話 恩を売れ（後書き）

作者「あれよあれよという間に、第十四話で完結の予感」

富士「で、次はどんな兵器を主役にするんだ？」

作者「潜水航空戦艦か、魚雷艇か、はたまた有翼潜水艇か……モニターは内部の設計が完了していないので、後回しになりそうではあります」

敷島「有翼潜水艇には爆薬を積んで……ということはいいよね？」

作者「そんなことをしたって、九分九厘人材と資材の浪費にしかありません。そうしなければ国家及び国民を護ることができない、というのなら話は変わってくるでしょうが」

三笠「時と場合によっては実行の余地を残しているのが、作者さんらしいと言えば作者さんらしいですが……次回予告をお願いします」

作者「軍閥を討つべく、彼女たちが一時的にその姿を変えます。次回『河用モニター』ご期待ください」

第七話 河用モーター

第二次革命による袁世凱の失脚後、それまで彼の元で北洋軍閥（北洋軍）としてまとまっていた段祺瑞（安徽派）や張作霖（奉天派）、馮国章（直隸派）等が再度分裂。史実と比べれば低調とはいえ、清王朝打倒に大きな働きを示した彼らが有する軍事力は侮れず、建國間もない中華民国には脅威であった。

これを受けて日本は日中協約に従い、中華民国の国軍に武器を輸出するとともに、中華民国国内に駐留する日本軍を軍閥の鎮圧に当たらせることを決定。とはいえ大規模な陸軍部隊の派遣は困難であり、砲艦による火力支援が関の山であった。

また黄河や長江、及び旅順周辺の警備も考えれば、支援に当たれる砲艦は精々一個戦隊。そこで第四十一戦隊が国民党軍の支援に、第四十二戦隊と「城州」「越州」「遠州」及び「甲州」からなる第四十三戦隊が、それぞれ黄河と長江の哨戒に差し向けられることとなった。

命を受けた第四十一戦隊では黄河の哨戒時と同じく、第一小隊と第二小隊を交代で支援任務に就かせることとした。ところがこれでは同時に展開できる火砲が三インチ砲四門にしかならず、一個砲兵小隊相当という余りにも貧弱なものとなってしまふ。

これに対処するため、四隻の基本設計が貨物船であり積載量に余裕がある点、及び船体内に居住区を設けることで重心が上がりにくい点を生かし、貨物倉上甲板の左右に三インチ砲各一門を増設。同時に貨物倉を仮設の居住区とし、砲撃要員として十二名の将兵と、彼らの弾薬及び食糧を搭載できるようにした。

一九一三年十月一日、旅順港。

「これで……本当に航行できるのでしょうか？」

改装が成った自分の船体を見て、羽州は不安になる。二門だけの装備でさえ過重に見えていた武装が、ほぼそのまま倍増したのであるから、見た目の重量感は尋常ではなかった。

そんな彼女の不安をよそに、同日午後六時に第一小隊は旅順を出港。天津付近を経由して、北洋軍閥が形成した北京政府の首府である北京を目指した。

この時間に出発した場合、北京周辺にある軍閥の兵営等に艦砲射撃を加えられるのは、翌日の深夜頃となる。敵の混乱を招きやすく、二隻の位置や或いは存在そのものを悟られにくくなるという利点はあるものの、逆に言えばこちらから目標の正確な位置を掴むことも困難になり、最悪の場合流れ弾で市街地に被害が出る恐れもあるのだ。

そのような事態が起き、且つ被害の発生が日本砲艦の砲撃によるものと知られれば、北京周辺住民の日本や民国政府に対する感情が悪化することは避けられない。こう考え日本側は、砲撃を昼間に変更するかまたは砲撃そのもの中止を提案した。

ところが強大な軍事力を持つ軍閥を一日も早く打倒しようと焦っていた民国政府は、市街地に多少の被害が及ぶことも止むを得ないと返答。日本軍が砲撃を行ったことは公表せず、民心掌握にも万全を期すため予定どおりの砲撃を行ってほしいと依頼したのだ。

翌日深夜、北京郊外の河川に到着した砲艦「羽州」。

「目標、北洋軍閥の施設！ 撃ち方始め！」

斜め前方に北京市街が見える位置へと移動した二隻が、時間差をつけながら全ての三インチ砲を発射する。全ての砲を一齐に発射すると反動で船体が横転する恐れがあったため、弾着観測が面倒になることを承知の上で、このような方法を探らざるを得ないのだ。

「このような盲撃ち同然の照準で、市街地に被害が発生しなければ良いのですが……今は、意識を集中させることぐらいしかできませんね」

所々で黒煙や炎が立ち上っている様子を眺めながら、羽州は気乗りしなさそうな顔で心情を吐露する。感情論だけで作戦の是非を論ずることは彼女としても潔しとしないところであったが、自分の感情を完全に無視した判断ができるほどには、羽州は冷静になれなかった。

約一時間半後、合計七二〇発という多数の砲弾を放った二隻は夜間のうちに現地を離脱。事前の予想どおり市街地にも被害が出てしまったものの、日本軍の砲撃によるものとは判明せず、北京市民の日本に対する感情の悪化は避けることができた。

この後も、第四十一戦隊は主に華北や満州の河川を伝い各所で対地砲撃を実行。また当時海上戦力が貧弱であった中華民国に代わり、軍閥が保有する艦船を攻撃する任務にも参加した。

第七話 河用モニター（後書き）

富士「これでは、最早砲艦というより水上移動砲台といったほうがいいな」

作者「ですが、こうでもしなければ砲撃力が不十分です」

敷島「五〇〇トン級指定船を基にした砲艦のほうがよかつたんじゃないの？ 同じ喫水に抑えるとしても、武装は五割増しぐらいいけそうだけれど」

作者「うーん……河用砲艦にしては妙に大きくてあまり萌えませぬ。私としては、同じ役目を果たせる艦なら小さいほうが好きなので」

三笠「つまり、作者さんはやはり対艦ロリ……ごほん、次回予告をお願いします」

作者（三笠を恨めし気な表情で見つつ）次回からは、欧州大戦時の話です。次回『完全封鎖』ご期待ください」

第八話 完全封鎖

第四十一戦隊が軍閥の攻撃を支援し始めた翌年の一九一四年、欧州大戦（後の第一次世界大戦）が勃発。史実においては中華民国が当初中立の立場だったため、日本を初めとする各国の河用砲艦は中華民国にて武装解除後抑留されることとなった。

即ち、同じく中立国であったアメリカ海軍の砲艦を除けば、列強の砲艦はこれまでどおりの警備ができなくなることになる。これは軍閥が割拠している当時の状況を考えれば、現地に存在する各国の国民や財産及び権益を保護するうえで、当然大きな不安材料になり得た。

そこで日本はサラエボ事件直後から中華民国に対し、軍閥への攻撃に対する支援を続けることと、欧州大戦後の軍事支援を交換条件とした、日本が欧州大戦に参加した場合の早期の参戦及び旅順及び大連の租借延長（ロシアの租借から九十九年間、即ち一九九七年まで）を依頼。未だに北京を制圧できていなかった民国政府はこれに応じ、日本と同日にドイツ及びその同盟国へと宣戦を布告した。

これにより武装解除を免れた砲艦は日英仏独などの数十隻に上り、英仏は資源基地となり得る中華民国に参戦を決意させた日本を評価するようになる。ところが同じく抑留を免れた以下のドイツ海軍砲艦は、敵中に孤立した形となり、自沈か青島周辺における徹底抗戦かの二択を迫られることとなる。

・イルティス級（イルティス、ヤグアール、ティーゲル、ルクス）
全長六六・九メートル、常備排水量九九七トン、速力一三・五ノット
四〇口径一〇・五センチ単装速射砲二基、三・七センチガトリング

砲六基

・オッター

全長五四・一メートル、満載排水量三一四トン、速力一五・二ノット
五五口径五・二センチ単装速射砲二基、機銃三門

・チンタオ級（チンタオ、ファーターラント）

全長五〇・一メートル、満載排水量二八〇トン、速力一三ノット
三〇口径八・八センチ単装速射砲一基、四〇口径五センチ速射砲一
門、機銃二門から三門

彼女たちは史実において「イルティス」級の四隻が青島で、「オッター」及び「ファーターラント」が南京で、「チンタオ」が広東でそれぞれ抑留されている。ところが中華民国が日本と同時に参戦する恐れがあるということがドイツ軍に知られたことで、状況は一変する。

青島にいる大型の「エムデン」は外洋での航行にも問題は無いが、同時期に青島に配備されていた駆逐艦（ドイツ海軍では大型水雷艇と称した）「タークー」や水雷艇「S90」が随伴することは困難。仮に随伴できたとしても凌波性の低さなどにより低速での航行を余儀なくされ、「エムデン」の足を引っ張って三隻が一網打尽にされる恐れもあった。

ましてや、通常の河用砲艦が外洋に出て南洋諸島に脱出することはほぼ不可能。そう考えたドイツ軍は日中両国の宣戦までに河用砲艦を七月中に全て青島に集合させると、無謀とは知りながら「エムデン」脱出までの時間を稼ぐ防衛戦力として青島の周辺海域に展開したのである。

その「エムデン」は八月六日に青島へと入ったが、日本軍が前日にドイツへ宣戦していたため、慌てて補給を行い翌七日に南洋諸島に向け出撃。しかし翌日「大隅」を旗艦とする第一艦隊によって撃沈され、青島は日中、さらにイギリスやロシアの勢力圏に囲まれた状態となった。

そして翌日、「羽州」型砲艦十二隻が第一艦隊到着まで青島を封鎖する目的でドイツ海軍泊地に接近。これに対してドイツ側は指揮下の全砲艦に出撃を命じたが、「タークー」と「S90」は魚雷が主武装であることから小型艦との戦いには向かないと考え青島に留め置いた。

同日午前七時、「羽州」露天艦橋。

「弾薬投射量では、こちらが約二倍。ただ、戦没艦が出る恐れが無きにしても非ずです」

十二隻の日本砲艦は辛亥革命以来三インチ砲四門を装備し続けているため、火力ではドイツ側に対し優位に立っていた。しかし限界に近い武装と乗員を搭載したため予備浮力は少なく、仮に貨物倉が満水になれば沈没は避けられないという状態であった。

「とはいえ私たちがここの包囲を解けば、青島の攻略作戦の支障が出かねません……背に腹は代えられないですね」

その直後、単縦陣を組んでいたドイツ砲艦群のうち、「イルティス」級の四隻が砲撃を開始。これに応える形で「羽州」型の十二隻も三インチ砲を撃ち始め、ここに海戦の火ぶたが切って落とされた。

第八話 完全封鎖（後書き）

作者「ドイツ語の文章を読むのが面倒すぎる」

富士「要目だけ調べればいいのであれば、それほどでもあるまい」

作者「いえ、史実の欧州大戦でドイツの砲艦がいつどこにいたかというのも調べていたもので……結果は、小説のとおりです」

敷島「で、そのまま青島にいられると本編との間に矛盾が生じて困るから沈める、と」

朝日「剩え、どさくさ紛れに旅順の租借延長を強いるとは……姑息ですな」

作者「こうしないと、支那方面の警備がやりにくくなるからね……時々思っけれど『支那』が変換で出てこないとは、これ如何に」

三笠「いろいろと『大人の事情』というものがあるのでしょうか。それでは、次回予告をお願いします」

作者「優勢な日本側ですが、無傷という訳にはいきません。次回『初めての手傷』ご期待ください」

第九話 初めての手傷

十九隻の砲艦が互いに単縦陣を組んだ状態で、青島の北方沖を東方に進みながら同航戦を繰り広げる。だが彼らの砲撃の精度には、主に三つの原因によって、非常に大きな差が開いていた。

第一の理由は、日本側の砲艦に小型とはいえ射撃指揮装置が搭載されていたこと。「大隅」型戦艦に搭載された装置をそのまま小さくしたようなこの装置の存在によって、一隻につき四門搭載されている三インチ砲の砲撃を一括して管理できるようになり、誤差の修正や射撃支持が迅速に行えるのだ。

第二の理由は、辛亥革命以降日本側の砲艦が幾度となく実戦での砲撃経験を積んでおり、練度に格段の差が存在していたこと。通常河用砲艦は警備や示威行為が主な任務であるため、実戦において実弾を用いた砲撃を行うことは少ないのであるが、軍閥の施設や舟艇へと日常的に砲撃を行っていた日本海軍にそれは当てはまらなかった。

第三の理由は、第一の理由とも関連付けられるが、各艦の搭載している火砲が共通しているために連携した砲撃がしやすいことである。日本側の砲艦は砲が一種類（三インチ五〇口径）しか存在していないのに対し、ドイツ側は機銃を除いても四種類の火砲を混載していたため、それぞれの砲が各個に砲撃と着弾観測を行うしかなかったのだ。

もしここに駆逐艦「タークー」や水雷艇「S90」がいれば、武装の増強で喫水が深くなっている「羽州」型砲艦たちに有効な雷撃を行うこともできたであろう。そして旧式とは言え魚雷が命中すれ

ば、彼女たちのような小型艦にとって致命傷となるのは確実であった。

ところがドイツ側は、羽州型砲艦の喫水を他の河用砲艦と同じく一メートル程度がそれ以下と誤認。魚雷が使えないと判断した二隻を後方へと引き下げ、砲艦同士だけでの勝負を挑んでしまったのだ。

「敵は砲艦だけ。なら、少なくとも轟沈ということは無さそうですね」

双眼鏡でドイツ艦隊を一覧した羽州が、安堵の息を漏らす。その直後、彼女自身の放った砲弾が「イルティス」の艦首砲を破壊し、これが両軍通じて初の命中弾となった。

「よし、命中弾はこちらが先に送り込めた……って、豊州？」

羽州が気配に気づいて振り向くと、そこには今にもぐずりだしそうな豊州の姿があった。

「姉さん、怖くないの？」

「自分の損傷や沈没を恐れていないと言うと、嘘になる。とはいえ、艦魂である私が損傷や沈没を必要以上に恐れれば船体にも悪影響が生じて、結果としてより自分の傷口を拡げることになりかねない」

弱気な豊州に発破をかけるかのように、羽州は力強く言う。だがその一方で、羽州は豊州のみならず、他ならぬ自分自身も鼓舞しようとしていた。

「そう……それも、そうだね」

直後、「ヤグアール」の放った砲弾が「豊州」の船首楼に命中。同時に豊州の右前腕が刃物で切りつけられたように裂け、周囲に血が飛び散った。

「きゃあつ！」

「豊州！ ……くつ、艦首砲がやられたか」

羽州が「豊州」のいる方向を一瞥すると、艦首の三インチ砲は一撃で砲撃不能に追い込まれており、その上火災が発生していた。そして火災による黒煙は艦橋より前の船体のほぼ全体を包んでしまったため、船体中央部両舷に増設された二門の三インチ砲も砲撃の続行は困難であった。

この事態を目の当たりにした「豊州」艦長は、取舵を切つて戦場から離脱。最後に艦尾砲から発射された砲弾が「イルティス」の艦尾に搭載されたもう一門の一〇・五センチ砲を破壊して、去り際に最後の意地を見せる形となった。

「姉さん……姉さん……っ！」

「豊州、早く自分の艦に戻って！」

「う……うん！」

豊州は涙目になりながら、傷口を庇いつつ「羽州」を後にする。それをしっかりと見届けた羽州は、気を取り直して未だ少なくない艦が健在なドイツ砲艦群に相対すると、あらん限りの怒気を孕んだ声で絶叫した。

「よくも、よくも豊州を……この場で、何が何でも一隻残らず仕留めてみせる！」

第九話 初めての手傷（後書き）

富士「河用砲艦同士の砲撃戦か……不自然にも思えるが、こいつらを青島に差し向ければこうなるな」

作者「ある意味、極小の艦隊決戦とも言えます……ハアハア」

敷島「うわあ……自分の『娘』が傷ついているって言うのに興奮してるよ」

作者「身売りや髑り殺しは勘弁願いたいですが、それ以外なら」

三笠「髑り殺しというのは某十字路作戦のことですね、わかります……というのはさておき、次回予告をお願いします」

作者「怒りに駆られる羽州が、今回は嗚咽を漏らすことになります。次回『油断即ち死』ご期待ください」

（以下、本編とは関係ありません）

作者「ダツフルコートとやらがどんなコートのことか知らず、『棒切れを輪っかに引っ掛けるコート』と言ったら家族に呆れられました」

富士「なあ……貴様、本当に現代人か？」

作者「少なくとも、体はそのはずなのですが……調べたところ、ダツフルコートとやらが世間に広まったのは、第二次大戦後にイギリス海軍の余剰品が出回ってからのことだそうです。つまり、日本に

伝わったのもまず間違いなくほんの数十年前でしょう」

敷島「つまり、戦後のことなんざ知ったこっちゃない、と」

作者「それに私の場合、暑がり年々悪化して、こうして投稿している今でも長袖のシャツを一枚着ているだけということもあるのではないかと。昨年の冬はとうとう、コートどころかマフラーや手袋の御厄介にもなりませんでした」

三笠「まあ、まだ『外套』と言わなかったただけかもしれないかもしれませんが……いつそ、東北なり北海道なりに移り住んではどうですか？」

作者「一応、腹案が無いわけではないけどね……っと、それではこの辺で」

第十話 油断即ち死

羽州の咆哮に耐えるようにして、一発また一発と砲弾がドイツ砲艦へと命中。そのうちの何割かは、的確に彼女たちの砲を破壊していった。

「敵一番艦、砲撃不能のようです！」
「目標を敵二番艦に変更させる！」

日本側は戦闘開始からおよそ三十分で、「豊州」「雲州」及び「上州」の三隻が被弾による戦線離脱を余儀なくされる。しかし搭載している砲の数で優位に立っていたため海戦の主導権を握り、同時刻までに「ヤグアール」と「ルクス」を除く五隻をほぼ戦闘不能に追い込んでいた。

特に非力であった「オッター」は「イルティス」の初弾発射から十五分後に戦闘能力を失い、次いで「チンタオ」及び「ファーターラント」が相次いで落伍。事実上四対十二の砲戦に追い込まれたドイツ側特みにできるものは、最早砲の口径の優位しか残されていなかった。

ただ彼我ともに大型の砲や魚雷といった決定打を欠いていたため、この時まで沈没した艦は両軍ともに皆無。日独共にそれは予測済みであり、お互いに敵艦を一隻ずつ損傷させて撤退に追い込んで、目標をすぐさま別の艦に切り替えるという戦法に徹していた。

「敵艦列は、実質的にあと二隻……ぐうっ！」

砲弾を撃ち返してくる敵艦の数が予想以上の早さで減っていった

ことで、羽州は一瞬だけ油断してしまった。そしてその瞬間を狙い澄ましたかのように、未だ健在な「ルクス」の放った一零・五センチ砲弾が彼女の艦尾を抉ったのである。

「くっ……艦尾砲を持って行かれましたか」

羽州が露天艦橋から自身の船体を見回すと、艦尾の三インチ砲基部に砲弾が命中したせいで、周囲に三名ほど乗組員が倒れていた。中には足や腕を吹き飛ばされていた者もあり、彼女は内心その光景に気分を害したが、彼らがそうなった原因に思い当たると忽ち罪悪感に苛まれた。

「何ということ……私が、油断さえしていなければ！」

腹部の裂傷に障るのも厭わず、羽州は苛立ちと自責の念から勢いよくその場に崩れ落ちる。彼女はこれまで、大した危険に襲われることも無く幾度となく艦砲射撃や小型艇の撃破といった任務を完遂してきたが、飽くまでそれは非正規軍相手の戦闘であった。

そのことを承知していたからこそ、この海戦にも最初は緊張感を持って臨めたのである。ところが戦闘が始まって自分たちがほぼ一方的な戦闘を展開する様子を見るうちに、肩透かしを受ける形となった彼女は知らず知らずのうちに慢心へと陥り、それは妹の負傷を目の当たりにしてなお根本的には無くならなかったのだ。

無論、彼女の油断だけが彼らの戦死の原因というわけではない。とはいえ乗員の戦死によって水課「r」の意識していなかった油断に気付かされた羽州は、一時的にはいえ自分が油断していなければ彼らが死なずに済んだものであると思ひ込んでしまい、必要以上の心理的打撃を受けることになる。

「これでは、とても艦隊の旗艦なんて……っ！」

自らの不甲斐なさに耐えられなくなった羽州は、戦闘中ということも完全に忘れて嗚咽を漏らし始める。そんな彼女の乱心が船体にも響き、これ以降「羽州」が放った砲弾の命中率は、被弾前と比較してほぼ半減したという異常な記録が残されることとなる。但し当時艦内は応急修理のために混乱していたため、命中率低下が不自然だと怪しまれることは無かった。

だが他の姉妹艦がそれから十五分程で健在な「ヤグアール」と「ルクス」にも相次いで命中弾を与え、全艦が手負いになったドイツ軍砲艦部隊は青島へと遁走。さらにこの翌日、青島に配備されていたエトリツヒ（エーリツヒ）・タウベ偵察機が、青島に接近する第一艦隊の存在を知らせた。

これを受けたドイツ軍は、全艦が損傷してまともに動けない砲艦たちが青島防衛に寄与することは無いと考え、十日には全艦が鹵獲を防ぐために自沈して果てた。そして十一日に第一艦隊が「ターク」及び「S90」を撃沈したことによって、青島のドイツ海軍戦力は消滅するのである。

また青島以外にいた東洋艦隊の残存艦も、まず八月にパガン島沖で「三笠」以下の第二艦隊と交戦して巡洋艦「グナイゼナウ」と「ニルンベルク」が沈没。次いで十二月にはフォークランド沖でイギリス艦隊と戦闘の末「シャルンホルスト」及び「ドレスデン」が失われ、事実上全滅した。

日本軍による青島の占領後、河用砲艦は軍閥攻撃への支援も交えつつ各河川や旅順周辺の警備に復帰。一九四〇年に「宇治」、「隅

田「及び「伏見」が除籍されると「羽州」型砲艦のみで任務に当たることとされ、そして対米開戦を迎えるのである。

第十話 油断即ち死（後書き）

作者「これで、本文と史実の辻褄が合うはずです」

大隅「しかし、ドイツ側としては全艦を自沈させる方が人的損害を
局限できたのでは？」

作者「ただ、感情面で河用砲艦の乗員たちがそれを潔しとするかは
微妙なところではある。それにこれでドイツ側が勝っていれば、青
島守備隊の士気高揚にもつながっただろうしね」

三笠「確かに、戦えば勝てる可能性が多少はあると言える程度の戦
力差ではありますからね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回はおよそ二十五年後、対米開戦時の話です。次回「仕組
まれた物資不足」ご期待ください」

第十一話 仕組まれた物資不足

コロラド級戦艦「メイン」爆沈の後、アメリカは日本に対して十二月八日の宣戦布告を表明。これに伴い、桂・ハリマン覚書に従い日米で共同開発が為されていた満州などにいた以下のアメリカ海軍砲艦六隻が、開戦までに日中の勢力圏から離れてフィリピンに逃げ込もうとして脱出を試みた。

- ・グアム級（グアム。ツツイラ）
全長四八・六メートル、排水量三五〇トン、速力一四・五ノット
- 七六ミリ単装砲二基、七・六二ミリ単装機銃八基
- ・パネー級（パネー、オアフ）
全長五八・二メートル、排水量四七四トン、速力一五ノット
- 七六ミリ単装砲二基、七・六二ミリ単装機銃八基
- ・ルソン級（ルソン、ミンダナオ）
全長六四・二メートル、排水量五〇〇トン、速力一六ノット
- 七六ミリ単装砲二基、七・六二ミリ単装機銃一〇基

なお「グアム」は史実において一九四一年一月、「アラスカ」級大型巡洋艦二番艦「グアム」の起工に伴い「ウェーク」と改名している。ところが仮想敵のひとつである日本の所謂「超甲巡」が計画自体されなかったことや、ナチスの政権獲得が無くなってドイツの「ドイッチュラント」級や「シャルンホルスト」級への対抗艦艇を建造すべしとの声が弱まったことから、それぞれの起工と改名も無くなった。

これを察知した中華民国は、各地の業者に対し、アメリカ軍への補給を可能な限り遅らせるか、あるいは拒絶することを秘密裏に指示。必要に応じて燃料や食料の買い上げなども行い、アメリカ軍砲

艦の脱出を一日でも遅らせようと奔走した。

妨害工作の甲斐あってか、アメリカ軍砲艦の中国脱出は遅れに遅れ、十二月七日の夜になってようやく満州を流れる遼河河口の営口を出発。その情報はすぐさま日中両国に伝えられ、両国はそれぞれ「羽州」型砲艦とその中国向け準同型艦十二隻を、大連の南方で待機させた。

翌朝、アメリカによる宣戦布告が為される直前にアメリカ軍砲艦部隊が日中の砲艦に接近。上空には中国とロシアの九五式攻撃機各二十機が小型爆弾を多数搭載して待ち構えており、アメリカ砲艦たちの無事な脱出は期待すべくも無かった。

同日午前六時過ぎ、砲艦「羽州」艦橋。

「艦長、アメリカからの正式な宣戦布告を確認しました」

「よし。念のため降伏勧告を行い、それに対する拒絶があった場合にのみ砲撃を開始しろ！」

「了解」

砲艦「羽州」から、英語で予め用意してあった降伏勧告の文章が送信される。ところが、言うが早いかアメリカ側の旗艦である「グアム」から返ってきたのは、拒絶の返事と同時の発砲であった。

「敵砲艦『グアム』より、幸福を拒絶する旨の返答がきました！」

「敵砲艦『グアム』……もとい、六隻とも砲撃を開始！」

「ええい……目標は敵一番艦、撃ち方始め！」

先頭の『羽州』に続いて、他の二十三隻も砲撃を開始する。なおこの時まで「羽州」型砲艦は武装を以下のように換装しており、

砲門数こそ減少したものの、一門当たり分速十五発という発射速度の劇的な向上によって弾薬投射量はむしろ増加していた。

三インチ単装両用砲二基二門（船首楼及び艦橋後部）
二十ミリ単装機銃四基四門（装備箇所は初期の機銃と同じ）

大連の南方から南下しようとする六隻に対し、日中両軍の砲艦が同航戦を仕掛ける。彼我の速力は十五ノットとほぼ互角であるため、被弾して速度を落とした艦がいた場合にはその艦を戦列から離脱させさえすれば、同航戦の場合において逃げられる心配は皆無に近いのだ。

「敵は少数……だけど、青島沖の二の舞にはさせない」

青島沖で自身の油断が一因となって乗員を死へと追いやったのかもしれないということについて、羽州は暫く自責の念に苛まれた。しかし幸いにして時と共にその鬱屈した気分も薄れ、今ではその時の失敗を冷静に戦訓として見つめることができるようになっていた。

そのことを象徴するかのように、「羽州」は三斉射目にして第一の命中弾を叩き出し、さらにその砲弾が「グナム」の艦橋を破壊。アメリカ側の司令官を戦死させ、ただでさえ劣勢なアメリカ側を混乱に追いやったのである。

第十一話 仕組まれた物資不足（後書き）

敷島「艦の大きさはともかく、砲撃力に差があり過ぎるよ」

作者「なおこの砲は、護衛艇が装備しているものと基本的に同一です。最初は軽量化のために砲身を短縮したものにすべきかとも思いましたが、爆雷や掃海具を降ろせば積載量は稼げるかなと」

富士「つまり、喫水は一メートル足らずに戻ったということか」

作者「そうなりますね。ただ大口径機銃や両用砲への換装なので、砲や機銃の数が同じでも重量が増しているかもしれせん」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「羽州の脳裏からは、未だに青島沖での一件が離れていませんでした。次回『戦訓と傷心』ご期待ください」

第十二話 戦訓と傷心

中露両軍の攻撃隊は、「グアム」の被弾を見るや断続的に急降下爆撃を開始。目標が小型艦であることや、練度の低さを考慮して小型爆弾を多数搭載しての攻撃となったが、海上での対艦攻撃はほぼ全員が初めてということもありなかなか命中弾を出せなかった。

「いくらなんでも……お粗末すぎる」

海面に水柱が立つばかりの攻撃を見た羽州が、呆れたように溜息を漏らす。日露戦争時の装甲巡洋艦に装甲を増設して標的艦としていた日本海軍とは異なり、中露の海軍には正規の標的艦そのものが存在せず、陸上や海上の固定標的を使用した爆撃訓練しか行っていなかったのだ。

しかしいくら命中率が低くとも、数百発の小型爆弾が投下されれば話は別である。まず「パネー」の艦首砲が破壊されたのを皮切りに、「ツツイラ」及び「グアム」等にも爆弾が命中。攻撃を通じての命中率は一割を切るという惨状であったが、一発あたり八発の爆弾を搭載していたために命中数は二十八発を数えた。

「敵一番艦、船体中央部で爆発！」

「目標を敵二番艦『ツツイラ』に切り替える！」

一方日中の砲艦はそれぞれ一個戦隊、四隻の砲撃を一隻のアメリカ砲艦に集中。弾着観測を行っていたために、一門当たりの発射速度は分速四発程度だったが、それでも一隻のアメリカ砲艦に対して一分間に三十発前後の砲弾を浴びせかけた。

砲弾や爆弾が命中するたびに、白く塗られた米砲艦の船体が、無残に焼け焦げていく。アメリカ軍も何発かの至近弾や命中弾を日中の砲艦に対して浴びせていたが、戦闘開始から十五分が経過してなお全ての砲が火を噴き続けており、状況は悪化する一方だった。

「敵二番艦、艦首より沈みます！」

一番に音を上げたのは、第四十二戦隊が目標としていた「ツツイラ」だ。およそ二十分の間、四隻の日本砲艦から五十発近い命中弾と至近弾を浴びた彼女は、左舷艦首からの浸水によってまず艦首が沈下し、最終的に左舷へと横転、急速に沈んでいった。

「他愛もない……っ！ また、油断するところだった」

敵を侮るような言葉が半ば無意識のうちに出たことに気付き、羽州は顔面蒼白となる。幸い彼女は数発の至近弾を浴びただけで、特に浸水も発生しておらず、二門の三インチ砲も何ら問題なく砲弾を放ち続けていた。

砲艦「ツツイラ」の沈没を皮切りに、アメリカ軍の砲艦は一隻また一隻と炎上。戦闘能力を失った艦の乗組員は搭載してある装載艇での脱出を試みたが、その装載艇も多くが被弾や火災によって破壊されており、着の身着のまま海へと飛び込む将兵が大半であった。

だがもし装載艇が無事であったとしても、米海軍の将兵が艇を海面に降ろして乗ることができたかどうかは疑わしい。というのも米砲艦の装載艇は船体の比較的高い部分（艦上構造物の二階部分とほぼ同じ高さ）にポートダビットで吊るされており、揚げ降ろしには時間がかかるからだ。

「敵砲艦、全て戦闘能力を失った模様です」

彼らの目前では「ツツイラ」と「パネー」が既にほぼ沈没しており、そして残る四隻の砲艦も炎上してのた打ち回っている。これに対し日本軍の損害は「羽州」、「陸州」及び「武州」が損傷しただけであり、中国側も同じく「桂江」と「柳江」及び「普江」の三隻が小破したに止まった。

「良かった……ただ、これが当然なのかもしれない」

青島沖の二の舞を踏まずに済んだ羽州は、ほっと胸を撫で下ろす。六隻の砲艦が失われた今、最早アメリカ海軍が中華民国に残している戦力はほぼ皆無だからである。いたとしても、それは精々雑役船と呼べるような小型船でしかないのだ。

そして陸上でも、アメリカ軍が中華民国に派遣しているのは僅かに一個連隊。これに対し日本軍は一個師団、中国軍は満州や上海周辺の陸上部隊だけで二十個師団、約三十万名（陸軍全体では三百万名近く）を数えた。

加えて中国軍は兵員数こそ史実の同時期における民国陸軍（約三八〇万名）に劣っていたものの、日本からの兵器輸入によって、特に満州や沿岸部に配置された軍の近代化は大きく進んでいた。例えば主力装備が日本軍の簡易版であろうと、史実の漢陽八八式小銃よりはましだったのである。

そのため、中華民国に展開していたアメリカ軍は圧倒的な物量に揉み潰されることとなり、一九四一年中に降伏若しくは全滅。中華民国はアメリカ企業が現地に建設していた工場などを軒並み接收し、予備部品や弾薬の生産を日本に輸出するとともに、工業技術を大き

く進歩させたのだった。

第十二話 戦訓と傷心（後書き）

敷島「まさか、対米戦中の話はこれで終わり？」

作者「他に特筆すべき出来事ありませんからね。ただ、対米戦後の話に二羽ほど割きました」

富士「ということは、これを含めてあと三話か……で、その後はどうするんだ？」

作者「次は、本編に少しだけ登場した魚雷艇の話です。現在執筆途中ではありますが、こちらもおそらく十話前後で完結するのではないかと」

朝日「なら、いつそ短編小説として投稿しては？」

作者「それだと忙しい方はきりの良いところまで読むというのが難しくなるから、今までどおりの方針で。我ながら、新聞の隅に載っている小説みたいな連載方法だとは思うけどね」

三笠「はたして、この外伝シリーズはいつまで続くのでしょうか？」

それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、時系列は対米戦後に移ります。次回『失われた大義』ご期待ください」

第十三話 失われた大義

満州に駐留していたアメリカ軍が駆逐されたのち、日本を初めとする各国の砲艦は平時と同様の警備を再開。しかしこの頃には軍閥のみならず、馬賊や匪賊と呼ばれる暴徒の集団も滅多に姿を見せなくなり、「羽州」型を含めた河用砲艦たちの存在意義に疑問を投げかける声もあつた。

それでも民国国内の治安は日本や欧米と比べると不安があつたため、なお河用砲艦の存在は必要であると見做され続けていた。ところがこの戦争中、弾薬や物資の製造と輸出で外貨と技術を蓄えた民国は、軍のみならず警察の近代化にも乗り出したのである。

これにより、治安は大戦を通して大幅に改善。同時に国力も向上した民国ではあつたが、そんな彼らにとって自国の領域を他国の軍艦が我が物顔で航行していることは、屈辱以外の何物でもなかつたのだ。安全保障の面から見ても、各国の砲艦が駐留することによって民国の利益になるとも言い切れない。

即ち、各国は長江に河用砲艦を駐留させ続ける大義名分を失いかけていたのである。そこで対米戦の終結後、イギリス及びフランスは自国の河用砲艦を中華民国へ売却しようとしたが、「羽州」型砲艦の準同型艦等を日本からの支援で多数建造していた中華民国は、これ以上河用砲艦を整備する必要が無いと判断して断つた。

そのためイギリスの河用砲艦は香港へ、フランス艦は仏印へと移動。こうして一九四五年までに「羽州」型を除く砲艦は長江から姿を消し、中華民国は残る日本に対しても「羽州」型砲艦を黄河や揚子江の定期警備から撤退されるよう求めてきた。

日本はこれに応じ、一九五〇年十一月末を以て、日本の租借地を除く地域から河用砲艦を撤退させる。そして翌日、存在意義をほぼ失った「羽州」型砲艦全艦の除籍が決定し、十二隻は佐世保へと回航されることになった。

一九五〇年十二月一日、旅順出港間際の「羽州」露天艦橋。

「私も、とうとう役目を終える時が来た……あとは内地に戻って解体されるだけ、か」

竣工後、佐世保を離れた時から覚悟していた自分の最期が、いよいよそう遠くない未来に迫っている。それまでは自分が死に対する恐れや未練など抱いていないと確信していた羽州だったが、今になってこれまでの経験が次々と思い出され、寂しさがこみあげてきていた。

「いけない……人間であろうと艦魂であろうと、いつか生涯を終えるのは必定。ならせめて従容として死を迎えることで、晩節を汚さないようにしなくては」

と言ってみたものの、自分が解体されることへの寂しさは少しも薄れない。そこに、同じく寂しそうな顔をした豊州がやってきた。

「私たち……やっぱり、解体されちゃうのかな？」

「私たちが何れ解体されるのは、遅かれ早かれ決まっていること。むしろ私たちはおよそ四十年も現役でいられたのだから、十分長生きした部類に入るはず」

妹の前で無様な姿は見せまいと、羽州は必死に虚勢を張る。そん

な姉の様子を見ていた豊州は、姉の気丈な振る舞いが精一杯の強がりであることを承知しながらも、遠からず自分と同じく解体されるであろう姉を傷つけまいとそのことを口には出さなかった。

「そう……だよ。これ以上何十年も生きるなんて、無理だよ。」

そう言うと、豊州はこれ以上涙を堪えきれないと考え、慌てて「羽州」を去る。残された羽州も涙こそ流さなかったものの、周囲の風景を眺めていたところで名残惜しさが増すばかりであったので、自室へと移動するとそのままおむろに寝台へと倒れ込んだ。

「これは……これは至極当然のこと。軍艦は必要とされれば建造され、不要と看做されれば処分される。私たちが解体されるのは、私たちの存在が必要とされなくなっただけのこと。」

自分の死を自分に納得させるように、羽州はうわごとのように咳く。するとその時「羽州」の船体がゆっくりと動き始め、少しずつ旅順から離れていくのを感じ取ることができた。

そして二日後の十二月三日、十二隻の砲艦は全艦にとっての生まれ故郷である佐世保港へと、就役から約四十年ぶりに到着。その際「羽州」と「豊州」の二隻だけは他の姉妹艦から離れた場所に停泊させられたものの、当時それを訝しむ者は当の羽州と豊州を含めて誰もいなかった。

第十三話 失われた大義（後書き）

富士「まあ、旅順周辺の警備だけなら護衛艇だろうと沿岸警備隊だろうと務まるわけだからな。むしろ、砲撃に特化したせいで潜水艦に攻撃できないこいつらでは汎用性に欠けると言わざるを得まい」

作者「準軍事組織である沿岸警備隊だと法的な違いが出てきますが、護衛艇でも勤まるというのは確かですね。ただ仮に能力面で問題ないとしても、そろそろ船体の損耗が厳しくなってくるはずですよ」

敷島「で、この二隻だけ別に繋留したっていうのは何？」

作者「それは、次回のお楽しみということ。とはいえ、多くの読者の方々には推測できてしまうでしょうね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「果たして、別に繋留された二隻を待つものとは？ 最終回」

第二の国威発揚』ご期待ください」

最終話 第二の国威発揚

十二月四日、佐世保。内地への到着から一夜明けたこの日、羽州と豊州は自分たちが生まれて以来ようやく戻ってこられた故郷の光景を、その目に焼き付けるように眺めていた。そしてこのことが、彼女たちに思いもしない情報をもたらすことになる。

「おーい、明日『羽州』と『豊州』は横須賀に回航だつてよ」

「まさか、あの海軍記念館つてやつか？」

二人で「羽州」露天艦橋に立っていたところ棧橋での乗員たちの会話を耳にし、ずつと大陸にいたせいで「海軍記念館」のことを何も聞かされていない羽州と豊州は、何事かと顔を見合わせる。そんな二人の反応などお構いなしに、水兵たちは会話を続けた。

「ああ。この二隻だけを横須賀に回航して、来年の頭から記念艦として半永久的に保存するらしい」

「へえ……まあ、俺たちの乗っていた艦がそんな役目にありつけるつてんなら、光荣だな」

ここまで聞いたところで、二人も事の次第を理解する。水兵の噂話に過ぎない以上、未だ疑う余地が無きにしも非ずとはいえ、思わぬ命拾いに豊州は思わず顔がほころんだ。

「良かった……って、言っていないんだよね？」

だがそんな妹を前に、羽州は未だ疑念を抱いている表情であった。

「もし本当だとすれば、私たちの存在がまだ必要とされているとい

うこと。私たち二隻だけというのが心細くはあるけれど、そもそもあの様子では疑う余地もあるから、まだ安心はできない」

なおこの時「羽州」と「豊州」の二隻だけが別の場所で停泊させられたのは、二隻だけが記念艦となる事実が他の姉妹艦の艦魂にも伝わった場合、文字どおり生死を分けることになる姉妹の間で争いが発生することを見越した勇の提案によるものである。

この配慮もあって、翌十二月四日、燃料と食料の補給を終えた二隻は無事に横須賀に出発。四日後の十二月八日に横須賀へと着いた二隻を待っていたのは、既に同年四月から記念艦として保存されている「三笠」以下数十隻の大艦隊であった。

「す、すごい……まさか、これだけの艦が保存されているなんて」

「なんだか、一緒にいるのが失礼に思えてくるぐらいの顔ぶれだよ」
自分たちの数倍や数十倍、艦によっては数百倍の排水量を誇る艦がずらりと並んでいる様子に、羽州と豊州は驚きや萎縮の気持ちを隠せない。そんな二人が立っている「羽州」艦橋に新たな艦魂が姿を現すと、二人は驚愕のあまり一瞬言葉を失った。

「ようこそ、横須賀海軍記念艦へ。二隻の来航を歓迎します」

「み、三笠元帥海軍大将！」

「え……ええっ！」

思わぬ艦魂の出迎えに、二人は慌てて拳手の礼をする。戦艦「三笠」は何度か平時に旅順を訪れたことがあり、羽州と豊州はその際に彼女と会っていたため、お互いに顔を知っていたのだ。そんな二人の仰天した様子が微笑ましく感じられ、三笠は思わず苦笑いをする。

「貴方たちには、これからこの横須賀海軍記念館で記念艦となり、日本国民が海軍の活動と歴史を知る上での生き証人となってもらいます……宜しいですね？」

「了解！」

「は、はい！」

二人の返事を聞くと、三笠は安心したような表情でその場を去る。残された羽州と豊州は突然の出来事に暫し呆然としていたが、冷静になるとどちらからともなく笑顔を見せた。

「良かった。本当だったんだね」

「私も、今の今まで半信半疑というのが正直なところだった。でも三笠元帥海軍大将からあのように言ってもらった以上、私は私の新しい務めを果たすだけ」

二隻は横須賀へと入港した後、簡単な改装工事を受け、一月四日に公開を開始。日本のみならず往時を懐かしむ外国人も彼女たちの元を訪れ、時には中華民国の軍人が公式に訪問することもあるという。

最終話 第二の国威発揚（後書き）

作者「終わった……けど、前作ほど感慨深くはならないなあ」

富士「まあ、一月足らずの短期連載だったからな」

作者「アクセス数は。まあ……ノーコメントで。技量が急に落ちたわけでもなし、世界観を変えたわけでもなし、やはり題材が読者数に及ぼす影響は甚大なようです」

大隅「確かに、アメリカとの正面衝突が確定だった本編では、将来の展開がある程度保証されていましたからね。それに、河用砲艦という艦種そのものの知名度が高くありませんし」

三笠「それで、今後の予定は？」

作者「一応、次は魚雷艇の話。その次は……候補はあるけれど、どれも艦魂が出るところで頓挫中だよ。次回作『艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174y/>

艦魂ともうひとつの日本海軍史外伝 河用砲艦「羽州」型

2011年11月27日05時51分発行